大崎市社会福祉協議会地域福祉活動計画策定のための

地域福祉推進ヒアリング調査

目　　次

１、大崎市地域福祉推進に関する地域調査結果概要　2

２、大崎市施設団体調査結果概要　6

３、大崎市子育て調査結果概要　10

大崎市地域福祉推進に関する調査結果概要

令和２年２月２７日

１．目的　　この調査は、大崎市における地域の特性を明らかにすることで、現状の分析と課題を把握し、地域福祉活動計画の策定に資することを目的とする。

２．実施団体　大崎市社会福祉協議会が実施し、東北福祉大学都築研究室に委託する。

３．調査対象　大崎市内の民生委員、区長会長、区長会副長

４．実施年月日　2019 年 8 月 20 日（金）～22 日（日）

５．調査方法　半構造化面接法による質的調査を実施する。

６．分析方法　KJ 法を用いて分析を行う。

７．調査項目

1-1 居住年数と地域の魅力と感じている点について
1-2 地域で困っていること
1-3 地区内または家庭内だけで解決が困難な事項
2-1 現在の地域行事や福祉等活動の取り組み状況について
2-2 現在の取り組みの内容
3-1 今後の地域行事のあり方や福祉等活動の取り組みの必要性について
3-2 今後の取り組みの具体的内容
4 今後地域に求めるもの

８．調査課題　「住民同士が良く協議し、福祉支援対象者の参加も多い地域ほど、現在の活動上の課題を把握しているので、今後の地域活動のあり方が明確である」

(1)　住民同士の協議がなされている地域ほど、現在の活動上の課題が明確なので、今後の取り組みの具体的方向性が明確である。
設定理由:住民の協議がなされている地域ほど住民参加が進んでいると思われ、そのために今後の課題と取り組みの方向性が明確であると思われた。

(2)　福祉支援対象者の参加がなされている地域ほど、現在の活動上の課題を把握しているので、今後の地域活動上の役割が明確である。
設定理由：福祉支援対象者の活動への参加に向けた取り組みがなされている地

域は、地域住民の参加しやすい条件づくりの創意工夫がなされており、今後に向けた課題と取り組みの方向性が明確であると思われた。

９．回収結果概要

調査した結果、インタビューできたのは全体で61件であった。内訳は、以下のとおりである。

回収数　61件　（古川地区　36件、岩出山地区　５件、鳴子地区　５件、三本木地区　４件、松山地区　４件、鹿島台地区　２件、田尻地区　５件）

１０．調査結果概要

1-1　地域の魅力と感じている点について暮らしてみて地域に対する印象は、自然豊かで食べ物がおいしく、人々の付き合いも良く住みやすい。一方で、どの地区でも少子高齢化が進んでおり、合併後は活気がなくなった、車が無いと不便であるなどの意見もあった。

1-2　地域で困っていることは、高齢化が進んでおり若い人がどんどん外に出ていき、地域の役員の担い手が不足している。世代の引き継ぎを行なっていきたいと考えている。

1-3 地区内または家庭内だけで解決が困難な事項としては、どの地区も買い物をする店の減少や移動手段の少なさ、ゴミ出し、また、冬の除雪作業の大変さについて共通する地区での家庭生活における課題や困っている意見が挙げられた。地区ごとに方法は違うが、解決に向けた取り組みがなされていた。

2-1 現在の地域行事や福祉等活動の取り組み状況に関する現在の取り組みに関する感想および評価としては、地域の活動として子供と高齢者が交流できる活動は住民からの評価も高い。しかし、地区での運動会は体が元気な人しか参加できないため参加者が偏ってしまうことが課題となっている。また課題として、世代間交流や運営側の高齢化や参加者の固定化、住民同士のコミュニケーション不足なども挙げられた。活動の運営側も参加する側も高齢化が進み、メンバーが固定されている。世帯数の減少によって、組織の人数が年々減ってきている。そのため、地域に住む若者との意見交換などの機会を設け、担い手の世代交代を進めていくことが課題となっているものの、若者がいない地区では世代交代も困難な状況となっている。

2-2　現在の活動の内容については、ほとんどの地区で代表者が集まって、会議で予算を決定している。会議に参加したり行事を運営するメンバーが固定し、毎回同じという意見が多くあった。必要な場合は有償ボランティアを入れたりしている地区もある。財源については地区ごとに違いがある。

各地区においてマンネリ化を脱するための行動の必要性は感じてはいるものの、大きな変化を与えても住民が当惑するのではないかという心配や、金銭的な面で不足があり、実際には毎年少しずつ変化させているところが多かった。また活動に参加のためにチラシ配りを行いながら安否確認も合わせてイベントの周知も行なっている。活動しやすいように

現在の活動の縮小を考えている地区もある。移動手段がない人の参加が少ないため、同じ人の参加が多くなっている。どの地区も障害を持っている方の参加があり、高齢者のための車椅子の準備も行なっている地区もあった。今必要なのは参加の手段の整備と、福祉対象者が参加できるようにするための用具や設備を作ることが必要となっている。

3-1 今後の地域行事のあり方や福祉等活動の取り組みについて、地域における現在の福祉の課題は大きく分けて３つ挙げられ、1つ目に少子高齢化による人材不足と一人暮らし高齢者の増加に伴う支援方法、2つ目に交通手段がないことによる公共交通機関・タクシー以外の移動手段の確保である。３つ目に施設に入った一人暮らしの高齢者の家の管理であったり、高齢者や認知症の人が増えていて巡回だけでは限界があるといった問題が挙げられている。

高齢者に対する見守り活動を徹底し、課題として挙げられる免許返納に対する働きかけを行い、高齢者や一人暮らしの人との付き合いとして巡回を行っており、包括との連携が重要になると感じる。移動手段・交通手段などの買い物、ごみ出しをする活動を明確に活動化させることが必要である。また、世代間交流を活発にしたい。以前から高齢者世帯への支援活動が課題であり、現在は加えて、新規住民とつながりを持つことが課題であるため、多くの人が集まって交流できる活動を作れると良い。

福祉対象者の勧奨のためには地域住民との話し合いが必要で、行政や社協からの助言・指導か助成金によって地域住民みんなが納得できる形で行う必要がある。車いすの人が活動に参加できるよう、婦人部や役員が迎えに行っている。年配の方が家にこもってしまうのは良くないので、外に出て活動できるような支援体制を作って行きたい。

なお、高齢化と組織は連動していて、役員構成が高齢化しており、世代交代が課題となっている。地域の組織としては、原点に立ち返って活動の見直しが必要との意見があった。

3ー2 今後の取り組みとして、まず予算については、充分と感じている地域と厳しいと感じている地域もある。若者の転出による地域活動の担い手の高齢化が、特に問題となっている。活動の内容に関しては、現在住んでいる住民に効果のある活動をしたい、子育て支援をして人口増加・孤独死予防のための安否活動をしたいなど必要な活動が混在していてまとまらないという声が挙がった。また、現状維持をしたいという意見もある中で、地域の学校や企業にも協力してもらって活動参加の幅、交流する年代の層の幅も広げた活動をしたいという意見もあった。

福祉対象者把握についてはプライバシーの問題もあるので近隣同士で呼びかけをしていきたいという意見が多かった。また、福祉対象者の方にどのようにしていただけるかを参加の意思確認も込めてアンケートしたい、車いすを運べる車を活動にほしい、集まりやすい場所で活動したいなどの具体的な要望があった。

4　今後どのような地域にしたいと考えているかについては、どの地区にも共通していつまでも安心安全に暮らせる地域、活気のある地域、近隣同士の交流が盛んな地域にしたいという声が多くあった。また、少子高齢化に伴い公共交通機関の整備、人口増加、人材育成

などを望む声も多かった。誰もが生き生きと暮らしやすい、地域の特徴を生かした地域作りが望まれていると思われた。

そのために自分が果たす役割は、声がけや見回り活動で周囲を巻き込みたい、自らも参加し地域活動の楽しさを伝えたい、意見や要望があれば声を上げていきたい、というように自ら先頭に立ち地域に働きかけたいという積極的な意見が多数みられた。また、地域住民はどのように取り組む必要があると思うかについては、地域住民が地域のことや隣近所に対して興味を持ち、隣近所を気にかけ、ひとりひとりができる範囲で活動に参加してほしいという意見がどの地域でも共通して見られた。

１２．調査課題の検証と考察

設定した調査課題は、「住民同士が良く協議し、福祉支援対象者の参加も多い地域ほど、現在の活動上の課題を把握しているので、今後の地域活動のあり方が明確である」を設定したので検証する。作業仮説ごとに検証する。

作業仮説１として、「住民同士の協議がなされている地域ほど、現在の活動上の課題が明確なので、今後の取り組みの具体的方向性が明確である」を設定した。

多くの地域で、地域活動を実施する組織の役員構成が高齢化してきており、かつ協議するメンバーが固定化していた。活動の企画段階において、住民同士の協議を積極的に実施できている地域は少なかった。一方で現在の活動上の課題として、少子高齢化に伴う課題が浮き彫りとなっており、今後この課題解消に向けた取り組みをあげる地域が大半であった。地域課題の明確化に関しては、住民同士の協議の有無にかかわらず浮き彫りとなっていたので、この仮説は棄却された。

作業仮説２として、「福祉支援対象者の参加がなされている地域ほど、現在の活動上の課題を把握しているので、今後の地域活動上の役割が明確である」を設定した。

福祉支援対象者の参加に向けた住民の取り組みは、一部の地域で展開されていた。多くの地域住民の参加と交流によって、地域づくりを進めるための課題解決に住民同士の創意工夫がなされており、そのための自分たちの役割を認識している声が聞かれた。このことからこの仮説は支持された。

１３．調査のまとめ

大崎市における地域福祉活動の課題と方向性について、地域の役職員等に対するインタビューを実施した結果、大崎市内における各地域の状況が、古川地区と古川地区以外に二極化しつつあり、その中でも古川地区以外においては、三分化していることが確認された。中でも玉造地区は、地域の継続可能性を危惧する意見も聞かれ、この危機意識に対処することが喫緊の地域生活課題となっている。一方古川地区においては、さまざまな社会資源が整っているものの、質的充実を求める声が聞かれている。

大崎市施設団体調査結果概要

令和２年２月27日

１目的

この調査は、大崎市における地域の特性を明らかにすることにより、地域福祉の課題を把握し、地域福祉活動計画の策定に資することを目的とする。

２実施主体

社会福祉法人大崎市社会福祉協議会が実施し、東北福祉大学都築研究室が集計分析する。

３対象

福祉施設長、法人の理事長、福祉関係団体の会長等

４調査方法

半構造化面接法による個別面接方式の質的調査を実施する。

５分析方法

KJ法を用いて分析を行う。

６調査項目

１施設や法人の居住年数と地域の魅力と感じている点について

２施設と法人の現在の地域活動状況と評価

３今後の活動意向や計画など

４今後の地域の中の施設・団体像

７回収結果

８月20日　岩出山（２件）、鳴子温泉（2件）、　８月21日　古川（6件）、三本木（1件）、松山（2件）、鹿島台（1件）、８月22日　古川（３件）、田尻（３件）　　合計　20件

８概要

調査項目別概要

団体分野別　（延21件）

１ボランティア　７件、　２高齢者　５件、　３更生施設　２件、　４児童　２件

５地域　３件、　６障がい者　２件

９調査結果概要

（1）質問項目別特徴

1-1 居住年数と地域の魅力と感じている点について

生まれてからずっとその地域で生活をしている方がほとんどだが、仙台や他の地域などから移り住んできて居住年数が10年ほどの方もいる。地域の印象としては住みやすく、行事を大切にしているが、世代間・地域の人同士のつながりが薄く、子育てに協力的ではないということがあげられた。地域の自慢や魅力としては交通の便が良く、自然が豊か、地域の特産を生かして物を作っており、お米が有名であることがあげられていた。

2-1 現在の活動状況と評価

年間活動計画は定例会を開き、予算を決め、会議や総会を通して決めている傾向にある。活動内容は地域の環境に対する活動や防災、犯罪防止のための啓発を行うなどして、住民が参加できるイベントを開催しているが、参加状況は女性や高齢者と偏りがある。福祉対象者に関しての参加率はいい。

2-2 現在の活動状況と評価

地域の人や環境、参加者の生きがい、地域からの理解のためが多くあげられた。その反面、やらなければいけないためやるしかないと思う団体や、業務の一環になっている団体もあるという特徴がある。地域との交流、参加者の生きがいのためなど全体的に活動を継続していきたいが会員の高齢化、人手不足、金銭面の問題等で継続が厳しい団体もある。地域との繋がり、他の施設との活動の活発さ、資金作りの面などで格差を感じている。住民との交流機会があったり、活動のしやすさを感じているという特徴が多く見られた。社協や市からの金銭面での援助がないという特徴があった。

3-1 今後の活動意向や計画など

全体的に人員不足、団体が高齢化している。若い世代がほしいという意見が多い。活動自体は団体の色があるため大きく変化させたくないという意見があった。活動頻度も会員の都合や体力、地域の年齢層を考えて頻度をただ増やすのではなくニーズに合わせて行うという意見が多かった。福祉の対象者については、あまり参加促進の対策を考えていないという意見が多く、参加していても、障害者の方と周りの方がうまく共生できれば参加を促進させたいという意見が挙げられた。

3-2 今後の活動意向や計画など

ボランティアの団体は高齢者を対象とした活動を考えており、高齢者の団体は子どもと協力した活動を実施したいと考えている。今後の活動の担い手に関してはどの分野の団体も新規の加入者、若い人を取り込むために活動していきたいということ、そのためには行政の協力を必要としている。所属団体や施設として実施したい活動は高校生や若者をターゲットにしたものと、高齢者の健康維持やコミュニケーションをとるための活動が挙げられている。他の地区と協力できると思われる活動は主に活動の幅を広げることが挙げられている。新しい人と出会うことでお互いに刺激しあえる関係を築いていきたいという意見もあった。そのためには自分たちの団体から外に出向いていきたいとのことだった。

4 今後の地域の中の施設・団体像

今後も活動を継続していくことが第一優先であることと、地域との交流をもてるような活動を積極的に行っていきたいという意見が統一してみられた。また、活動内容は違うが支援の体制を整えるために研修の場を設けることや団体や施設側から支援に活動について発信する場を設けたいという意見も多く見られた。

（2）団体別特徴

施設・団体別まとめ(地域貢献活動を行っている団体・施設ほど今後地域でどのような役割を担っていけば良いかが見えていることのつながりを確認できるかについて)

1 ボランティア

現在、地域の草刈りや各家の手伝い、犯罪防止の啓発や受け入れ、生活環境の整備、ビラ配りや集会などを開いている。今後、担うべき役割として活動の場を積極的につくること、各家の安否確認、コミュニケーションなどがあげられたことから、つながりが確認できた。

2 高齢者

活動内容はボランティアの支援が主で、具体的には大会の指導、公民館、無人駅の草刈り、スイセン植えをしている。今後は積極的な呼びかけや施設内の状況を良くすること、アウトリーチをしてアドバイスをすることなどがあげられたことからつながりが確認できた。

3 更生施設

立場上、地域貢献活動をすることが難しいという施設もあった。しかし、交通の見回りや公開ケース研究会、犯罪防止の啓発や受け入れなどを行っており、今後は保護観察官をサポートするためのボランティア、啓発、研修を積んで、意識を向上させる活動をしていきたい、地区で協力体制を作っていくことなどがあげられたことから、つながりが確認できた。

4 児童

現在、地域のなかで運動会や夕涼み会などを通して様々なことを学んでもらうために多種にわたる活動を行っており、今後それらの活動を地域の活性化とともにさらに行っていくことなど、つながりが確認できるグループが多くあった。

5 地域

自立した子供を育てることや一人ひとりの健康のために行うべきことに関しては、現在の活動と今後の地域像に関連を確認できた。しかし、行政との連携に関しては地域像に挙げていても現在の活動につなげられていない現状が確認できた。

6 障がい者

年間行事で花見や忘年会を行ったり、季節の祭りを開催するなど親睦会を開いていると記載されているが、実際には地域が閉鎖的であり、施設の活動を通して地域を変えたいと

は
思っていない意見が見られたことから、つながりが確認できなかった。

10.、調査全体のまとめ

大崎市は全体的に住みやすいと感じている人が多いが人間関係の希薄化がある。活動の参加状況は高齢者、決まっている人が多い。活動の目的は参加者に生きがいを感じてもらうため。活動の継続意向はあるが団体ごとに様々な問題で厳しいところもある。社協などからの金銭面の援助がもっと欲しいという声が多かった。また、団体内部の年齢層があがっているため若い人や男性などに参加して欲しい。各団体人員不足や高齢化などの問題で悩んでいる。そして、障がい者の団体以外は今後の活動を積極的に行っていこうと考えている。

ほとんどの施設が今後の団体像として役割を考えていたが障がい者の団体は自分たちがどうにかできる問題ではなく難しいと考えている。活動の継続意向はほとんどの団体がある。また、各団体から社協への要望が多くあげられた。具体的には連絡の遅さ、助成金について、様々な世代へ視野を広げて欲しいなどの声が上がった。

大崎市子育て調査結果概要

令和2年1月29日

1. 目的

この調査は、大崎市における地域の特性を明らかにすることで、現状の分析と課題を把握し、地域福祉活動計画の策定に資することを目的とする。

2. 実施主体

大崎市社会福祉協議会が実施し東北福祉大学都築研究室が集計分析する。

3. 調査対象

大崎市内の子育て団体、ボランティア団体、地域の障がい者関係団体。

4. 調査方法

半構造的面接法による質的調査を実施する。

5. 分析方法

KJ法を用いて分析を行う。

6. 調査項目

1 居住年数と地域の魅力と感じている点について

2 現在の活動に関する評価

3 今後の取り組みの活動内容について

4 今後地域に求めるもの

7. 調査年月日

2019年8月20日～22日（2泊3日）

8、調査上の課題

（1）子育て分野の仮説

「社会資源のある地域ほど、社会資源から情報を得ることができるので、サービス利用の満足度が高くなる」と仮説を設定した。

（2）障害分野の仮説

「障害福祉関係の団体活動を展開する人ほど、活動を通じて団体から様々な情報を得ることができるので、地域づくり意識が高くなる」と仮説を設定した。

9. 回収結果

2019年8月20日　鳴子温泉（2件）、8月21日　三本木（2件）、鹿島台（2件）、8月22日　古川（3件）、田尻（2件）　　合計　10件

10. 調査結果

1）子育て分野（古川と他の地区との比較）

1 居住年数と地域の魅力と感じている点について　全体として自然豊かで住みよい街という印象を持つ一方で、子育てや障害福祉について、古川地区に社会資源が集中している実態に対して格差を述べる意見が見受けられた。

2-1 現在の活動に関する評価　古川は、鳴子と同じように前年度に乗っ取った活動をして

いるのが見て取れる。　一方、鹿島台では大まかなことをこれまでの十年で決めており、要望があれば様々なところで連携している。(現在は、母親クラブの活動として人形劇やハンドベルの活動)　田尻は現在の活動計画について聞き取れていなかった。

(2)プログラム作成手順　古川では、施設の先生がメインでプログラムを作成している。他の地域では、ミーティングをしてプログラムを作成したり、NPO の協力を得てプログラム作成している。

(3)予算　地域によって徴収の仕方や額が様々で、古川と他の地域との比較しての違いは見て取れない。特徴的なものとしては、田尻では、フリマでの売上金を活動費に当てているというものだ。

(4)ボランティア参加状況　古川・鹿島台ではボランティアの参加がない。他の地域では、ボランティアの参加が見て取れる。ボランティアの参加がない古川では、役員会や、子供たちが夏休みのときに面倒を見てくれる人がほしいとの声がある。

(5)活動への参加者の状況　古川は自主サークルを行っており、参加者がほぼ一緒というのはほかの地域と一緒である。一方で、鹿島台では、会員でも活動に参加していないという人が多いという現状である。

2-2現在の活動に関する評価　古川は人とのつながりの場が多いため、活動の参加者が他の地域に比べて多く、アットホームな雰囲気になっているというのが見て取れる。他の地域では、人とのつながりの場が少ないため、活動の参加者が減少しているように思われる。

(2)団体活動を知るきっかけ　古川、他の地域ともに会員の方に声を掛けられたり、募集のチラシを見て自ら参加したという人か多い。

(3)活動参加の動機　古川も他の地域も、質問項目の団体活動を知るきっかけ同様に、ボランティアに参加しており、会員の方に声を掛けられたことにより、参加を決めたという声が多かった。

3. 今後の取り組みの活動内容について　古川では、今後料理教室をしたいというような声があり、活動に対して意欲的なのが見て取れるが、他の地域では、今の活動のままでいいなど活動に対してあまり意欲的ではないのがみてとれる。

4ー1今後地域に求めるもの(活動以外での交流・世代間交流について・そのための自分の役割)

どの地域も共通して保護者同士や世代間の交流がほしいと感じているのが見て取れる。

4ー2今後地域に求めるもの(保育所など子育ての資源について・地域に求める機能)

古川は、子供を預かる場所はたくさんあるために情報を求めている一方で、他の地域では子供が少ないという背景から、情報というよりかは、他の行政に力を借りて子育て環境を整えたいというおもいが見て取れる。

2)障害分野

1　居住年数と地域の魅力と感じている点について

(1)出身地および今の地域に来て何年くらいになるか　生まれも育ちも大崎市で 74 年間三本

木に住んでいる

(2)家族は何人か　３人

(3)この地域の魅力や自慢は何か　魅力としては、交通の便がいい、地域の人が優しく、郷土愛が強いところがあげられる。

2-1 現在の活動に関する評価

(1)現在の年間活動計画　１年間の事業計画や経費を組んで終わったら報告する。役員さんや幹事さんを交えて総会を開いたりする。三本木の特徴の１つにスポーツに力を入れているという点がある。特にフライングディスクに力を入れている。ただし、マンネリ化し固定化されつつある

(2)プログラム作成手順　１年間の事業計画や経費を組んで終わったら報告する。役員さんや幹事さんを交えて総会を開いたりする。三本木の特徴の１つにスポーツに力を入れているという点がある。特にフライングディスクに力を入れている。

(3)予算　予算はある。町民から２００円ずつ徴収している。

(4)ボランティア参加状況　ボランティアはいるのだが、協会に入ってくれる方が少ないという点がある。ボランティアの会、社会福祉協議会の協力がある。

(5)活動への参加者の状況　参加者は基本知的障害者が中心で同じ人が集まっている。

2-2現在の活動に関する評価

(1)活動の良い点・悪い点　声がけや名簿を作るなどして参加者を募りたい。

(2)団体活動を知るきっかけ　調査対象者の子供が障害を持っていたため。

(3)活動参加の動機　調査対象者の子供が障害を持っていたため。

3. 今後の取り組みの活動内容について　今行っている支援を持続させたいなと思っている。面白おかしく、無理のないレク活動をしたり、新たな会員が増えたらいいなと思っている。活動に対する意見が少ない点、行政による支援が欲しいなどの要望もある。障害を持っている子と持っていない子が直接関われる場を作りたい。役員の後継者不足、人材不足があるため新しいことをするのは難しいと考えているため、今行なっている活動を継続できればいいと思っている。

4－1今後地域に求めるもの(活動以外での交流・世代間交流について・そのための自分の役割)

・社協や民生委員などの様々な機関との協力を通して、レク活動を充実させたい。保護者同士や世代間の交流は少ない。障害を持った子供たちが自立できるように企業と施設、地域とつなげる架け橋のような役割をすべきと考えている。

4－2今後地域に求めるもの(保育所など子育ての資源について・地域に求める機能)

障がい者の自立支援を積極的に行えるように、施設ができてほしいと考えている。親なき後の障害を持った子供の施設、安心して預けられる場所があればと思う。

１１、仮説検証

(1)子育て仮説検証

「社会資源のある地域ほど、社会資源から情報を得ることができるので、サービス利用の満足度が高くなる」と仮説を設定した。サービスを利用したことで、様々なことを知るきっかけになったという声や家で子育てをしている家庭で保護者が母親クラブ等を拠り所としている声が多く上がっていることから、この仮説は支持された。

(2)障害仮説検証

「障害福祉関係の団体活動を展開する人ほど、活動を通じて団体から様々な情報を得ることができるので、地域づくり意識が高くなる」と仮説を設定した。役員を交えて総会を開き、様々な機関と連携しているという声と、今行っている活動を継続したいという声が上がっているという情報が得られた。ただし、三本木地区以外の地区で障害者団体の調査ができなかったため、比較検討することができなかった。したがって、検証に至らなかった。

１２、考察

子育てに関する仮説は、支持された。子育てに関するニーズは、大崎市内においてどの家庭・地域においても共通して存在しているものの、ニーズ充足に必要な支援サービスを提供するための社会資源が限定的にしか存在しないため、この社会資源とつながっているかどうかによってニーズ充足につながる情報も、社会資源とつながっているかどうかに左右されるものと思われた。

一方障害分野においては、子育てや高齢者分野のように社会資源が存在しているわけではなく、また「障害」とはいっても障害類型が多岐にわたるため、即必要な社会資源につながるというものではないと思われた。例えば障害分野の施設があるとはいっても、知的障害だったり肢体不自由だったりと、障害分野でも様々である。そのため適切な情報をもたらしてくれる存在としては、障害福祉関係団体となるものと思われた。しかし今回の調査においては、多くの関係者から情報収集できたわけではないため、具体的に検証できたわけではないため、可能性として確認されるにとどまった。

１３、調査のまとめ

大崎市内のどの地域においても共通して、地域での保護者同士や世代間に交流を望んでいるという事が確認された。地域によって子育て環境の差が激しいため、行政の力を借りたいという声も上がっている。活動に対してマンネリ化しているという声や、障害を持っている子と持っていない子が直接関われる場を作りたいという声が上がっている。また、親なき後の障害を持った子供の施設、安心して預けられる場所を望んでいるという事が確認された。

障がい分野では、他との連携（行政、団体）を必要としている。その一方、子育て分野では、連携が取れているという印象。連携が取れているからこそ、これからの子育てについてこうしたいなど言う要望が多く出ていたと考えられる。また、障害分野では、保護者同士や世代間交流以外で、健常者との関わりを望んでいるのが確認された。